繪本西遊記

初編

四

へ遠1
2500
40-4

2500
40-4

高とも吏くの職分家業を固て持用の器物を造ること
夏世間一般之然るに近世写本の巻中小酬り白髪
書人又ハ形さへ覚束なき木偶人或ハ見苦き
画き君臣父子の中々面を赤め合事
真職の道異へ癖付おのふハ縛一とおり著述拙く筆者の誤り
ひらがな只言語荒く其題ちと咎免巻中への戯画楽書ハ作り絵へ
池田屋常に是を歎ひ夏涼ー閑て主ふ代りて備君子作るるの爾

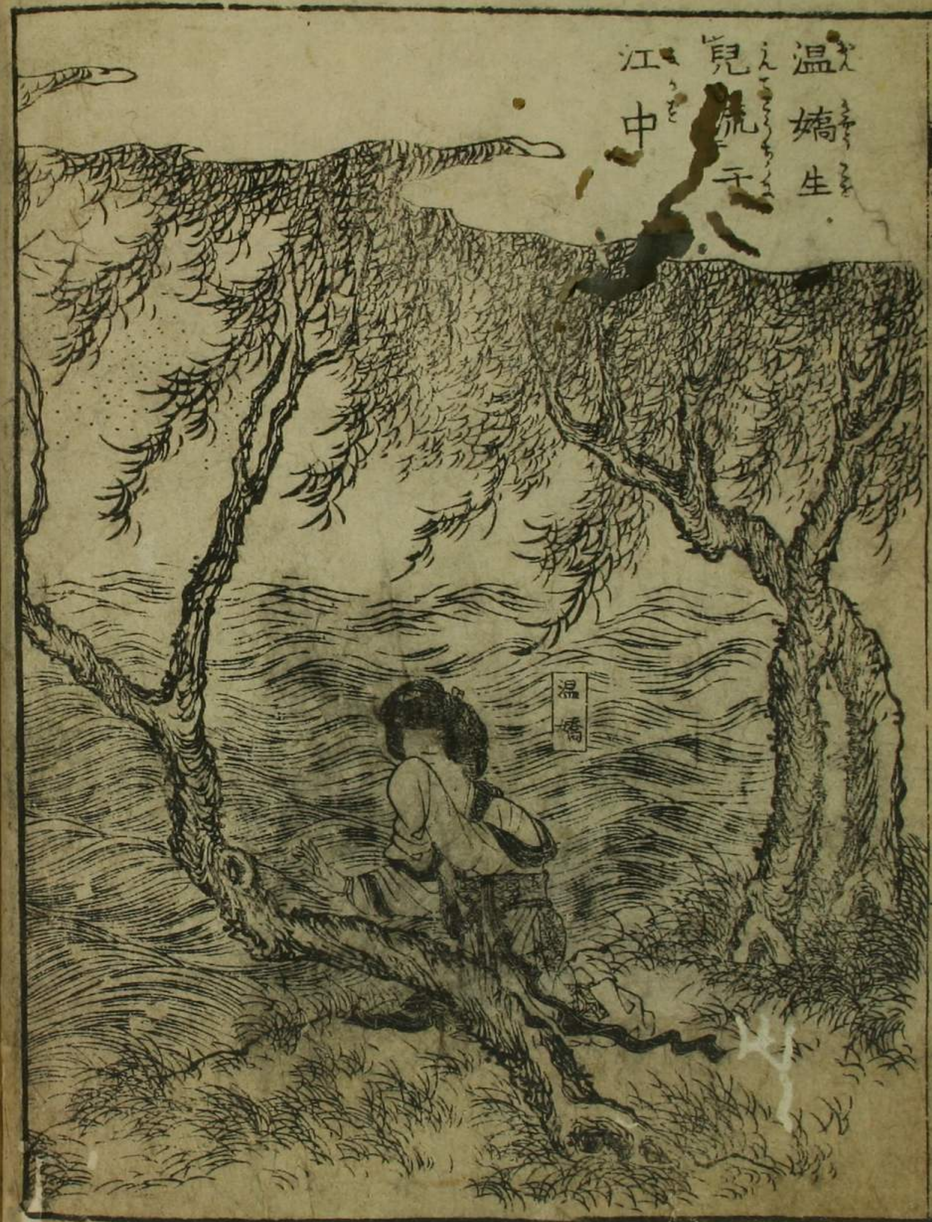
麝石山人識

世界本貸所　東京牛込細工町　誠光堂　池田屋清吉

續本西遊記初編卷之四

前章之下

陳光蕊が妻温嬌ハおのゝ設けの賊に陥りて月日を経
ること久しく時既に光蕊が亂を身に治ぬまハ子生生の後ハ海
河へも身を投て死をいさぎよくなさんとのこゝろを究め劉洪
に分をはなれのゝ扱月を送りる一日劉洪外に出ー留主の
間に産の氣ばさて同絶ーたのごとき男子を生りゝ時
兼ねて現ともなく耳の内に人声ありて吾ハ是南極星君
なり觀寺薩の作と文けに児を你に与ふるなり後かゝらば
名を光蕊と云ふ且又你ら夫光蕊ハ龍王の救ひを得て今龍宮


温嬌生
見流于
江中
温嬌

玄奘

止まり夫婦相會して仇を報ふ時にぐゝと云かとおりゝ驚たて
正氣はきさう温嬌奇異のおりひをなゝよ孫そゞとかぎりこは
志[illegible]賊夫劉洪えう者り式子と刃んて早く殺んとす温嬌慌き
さゐぐにとかゝなぞめ其命を助んとかきゝどけゞる賊ゑに是況
ゆるこゞ今い詮方なくさらべ式子を江湖の中に志川の奥の孩り
葬るべゝと自らも小児を抱へ江の辺りへ出るゞ不思議なる共一片
の板岸の側へなゞれゝたり温嬌是を見て觀音菩薩と心に篤
其板の上に子とかきの せ帯を以く縛めけ和小指を咬て血を
ゝろて父母の姓名事の始終を巻くかき記し小児の胸にうけ
再びえぐり多ふ時の證しにて児の左の足の小指を咬で歯形を
入る性命を天に任せ江の中へ押流し涙をおさへく別りるハ表

なりしにつゝきゐなりし式児あに順ひ流まに引れ遂に金山寺
禁に停まり金山寺の長老法明和尚ひろひ揚て名を江流
号ゝをたのまて養育せさせるひるゞ俗に年月のゝる事東
流のあまりも尚ちやく江流こに十八歳になりしほどに則剃
髪させく法名を玄奘と名ゞけ麻頂受戒〳〵道心堅固に修
行まる一時長老母の血書とり出して玄奘にあたゑに玄
奘見て声を放く大きふ哭きいふりて母に一度めぐり合
ゝの仇を報ぜんとて長老にいとゐと告げかの血書を持て化緑
和尚となりて江刃に赴きる式時温嬌ハ門前に出く四方気
色を詠めゐるゞ親子の縁のおそるまゝにや玄奘と門
外に来りて抄化を唱ふ温嬌則よび入て齋飯をあたへけらく式僧

光壹
匡壹

玄奘
遣冊
復父
之讐
玄奘
劉洪
關山

の華止言談を見るに亡夫光蕊によくも似たりとて甲乙をその姓
名を問へば玄奘則父母の姓氏身の不幸に及び事と審らかに物
語りかの血書をとり出して見せられば温嬌おどろき怪しむ事いふ
かたなく曰ハ你こそ眞の吾子なれとて親兒一処に抱き帰泣
く温嬌やがて賊夫劉洪が事を漏すべかりしかば你を殺さんとは
やく金山寺に送るべしとて玄奘を送りかへし其後佛系にて法
度く金山寺にゆき長老玄奘に射面して事の次第をつぶさに
物語り遂に玄奘を長安の都に登し亟桐殷開山に依て子細
に是を訴ふ太宗皇帝認めて早く賊を誅せんと下
知し亟ば殷開山自ら御ノ木の軍六萬余騎を引率して洪
進殺し賊の衙をひらく取かこむ劉洪李虎の両人を生捕り

むちうちに事名一百李虎が首軸て大路に梟させ劉洪をうち
洪江の渡口に到り前手陣先鋒を殺しうち虜にあるべき法なり
ら劉洪が肝を斬出しあ中に沈めて光蕊が霊を祭られて
江中に巡海夜叉これを見て忙き龍宮へ走り帰りかくと報ず
ば龍王やがて光蕊を生出し其魂魄を尻の内に納め夜叉に
命じて江に送り返らしむ玄奘温嬌殷開山の人々是を見て
喜び事限りなく互にもとりてはじめ殺らんと抱き唯夢の如
きり〻見涙を弄ひにいとなみ光蕊ハ昼日萬花店の劉小二が
家に帰り母の張氏を伴ひ返り俱に長安に入る前後の次第逐
一に奏聞しくれば太宗皇帝大きに感じて光蕊を又
測殿大學士の職を授け玄奘ハ洪福寺に在て佛道を修行

漁翁一商量事業

せしめるなり

老龍王拙計犯天條　魏丞相遺書託冥吏

長安の城下に兩人の隱士あり一人は漁夫にして名を張稍と云一人は樵夫にして名を李定と呼り一日兩人長安の酒館にて醉を買し涇河の岸に至りて相別んとせし時漁翁の張稍推へ李定に向ひていはく明日街頭少故人あり山に入らば虎の害を用心せよ〳〵汝不慮の事あらば再び吾と俱に酒館に來り醉を重ね相たのしむ期にぞ李定怒て曰汝何ぞや我を咒ふことかくのごとくなるや我は〳〵山に入り虎に害せられは汝もまた浪に遇て水に溺るべし張稍答て云我は一生水に

おにろくの患なし李定の曰く天に不測の風雲あり人に暫時の禍福あり汝何をもつてあに必ずしも患なしと決定したるや張稍の曰く長安城の西門に一人の賣卜先生あり我日々に試ん生へ鯉魚一尾を送りて占を頼て其てばにまことゝ網を下し約と垂るに百〻び下して百〻び得ざるのいはく兼ては其日の風雨晴墨一つとしてたがはざるなり李定は是故に賣卜先生にはなはだ信ず我敢て水難の災ひなし李定これをもて大に歡快し涇明日生會べしと約をなし兩方へ別れ去りぬこの時涇河巡水夜叉岸のほとりにありて式拘法を守る龍宮城に入り一告げて龍王これを聞てよきに憤り若かくのごとくなる時は中にあるの如の吾眷屬共ごとく人に賣卜がために捉殺されて我自ら長安城に至り賣卜

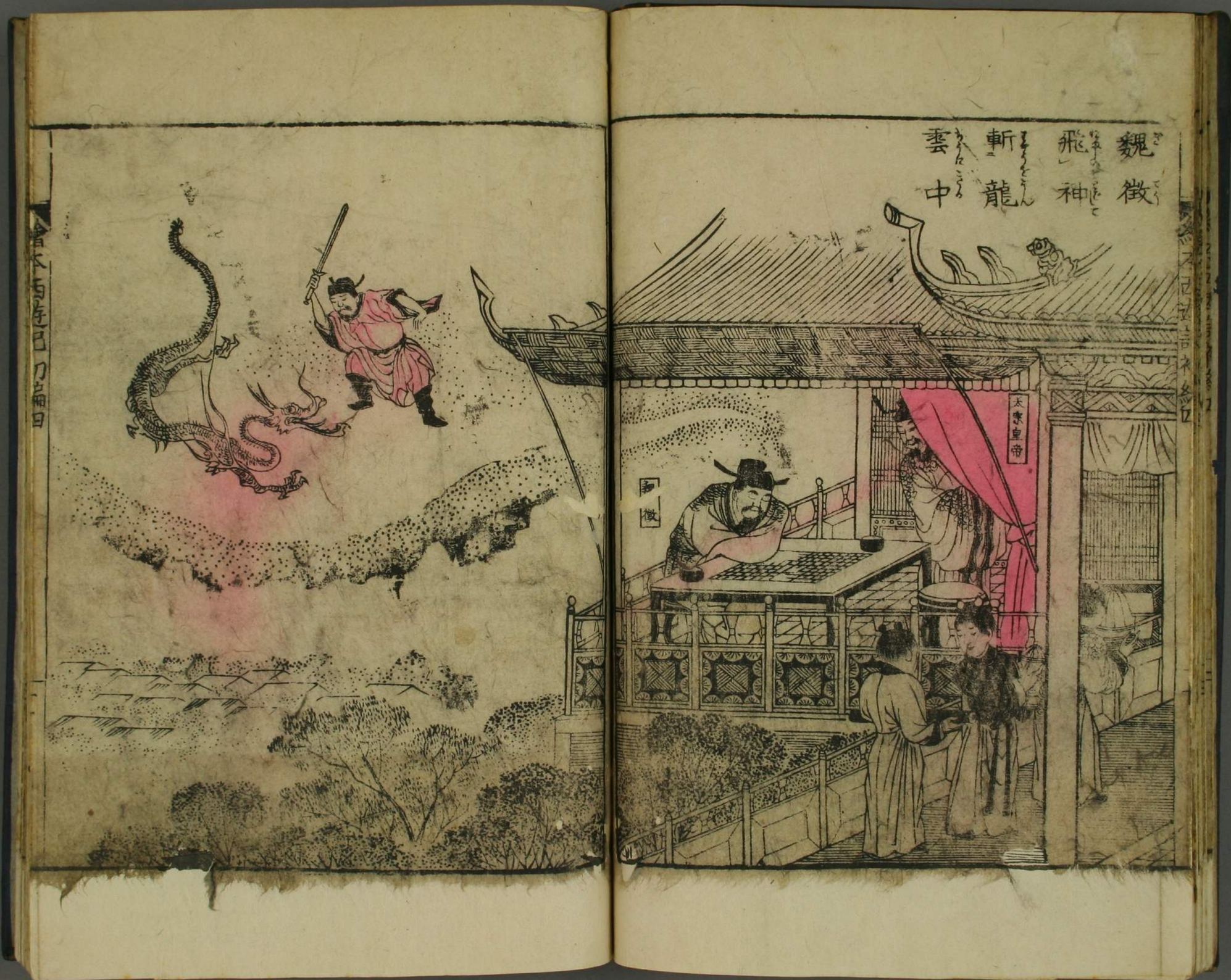
龍王設計
ちゑをやぶる卜舗
卜舗
涇河龍王
袁守誠

者を求め殺さんとて餌を提耀して出でんとはあらずこの奥臣等拙
き計ひ ものろひ大王今怒りを起して彼所に出でゝ[illegible]
洪あり長安の人民を損じ上天の怒りを蒙るべし
早く方便をもつて[illegible]かの賣卜を殺すべしもしかるべからん
ければ龍王も乞と見れば老ごびを変じて一人の書生となりて
長安城の西門に立つこゝかゝることあるに果して一箇の卜鋪あ
り生姓は袁名は字誠と申て世に高き賢士なり龍王鋪に
立ちて明日の天氣いかんと問らんに生則独占一課して断じ
て曰く

雲迷山頂霧罩林梢若占雨澤准在明朝

龍王の曰く明日何時に雨ふる事何程となりや生
の曰く辰の時に雲起り巳の時に雷鳴り午の時に雨ふる未の
時に雨止むと得ること三尺三寸零四十八點なるべし龍王
の曰く你其ことはゝ遺ばゞんば我金五十両を以て你に謝べし
若も時刻相違尺寸もあらばこの卜鋪を粉のごとく打碎り你ら
人をもどりに罪を犯すべし生笑て我言一毫も違ひなくば
你が心に任せべしと互にかゝ約束して別れて龍王は龍宮
に帰りけり時に上天より玉帝の勅書ありて龍王に命じ
玉帝其書に曰く

敕命八河總驅雷制電行
晋濟長安城　明朝施雨澤


魏徵
飛神
斬龍
雲中
太宗皇帝
魏徵

かくのごとく明日長安城に到りて魁限の前にて袁守誠
が判断と一毫も差ひあらざれば龍王大きに驚き塵世の中かく
霊人のありるよ所詮雨を行ふ時魁を差へあの場てを掘遣せしめ
夫と罪にして代賣ト を矢いぞんべる族の永き患ひならんと風伯
雷公 雲童 電母とりたつる事の子細を委しく命じ次の日
すと書生と多と変じ長安城に至る函の刻限を待居たりか
ねたるこそこらく事なれば玉帝の命に遠ひ巳の時に雲雨
布き午の時に雷鳴し未の時に雨ふる函と止めあとは
ろ半三尺零四十點袁守誠が占と一時三寸八點を遠えてス
龍王この先生ぞト舗に来りしものとも庭招牌を持参り
扇を踏乳し大きに罵て曰く你妖人今日の雨時刻天すらく

你が口と掘遣せり你が死罪を饒と袁守誠叮呵と打笑ひ
我原来死罪は你い却て死罪あり你い是涇河龍王の書生に
変じたるなり今玉帝の勅に遠ひ函を降るの時刻を沒む玉帝
你が罪の軽からざるを以く明日午の時唐王の臣下魏徵に命じて
你を斬しむ然る時返て吾を罵り辱むるい何事ぞや龍王是を聞
て大きに驚き先生あられ我を救ひ給へ袁守誠の曰く
你命を助らんと欲ば太宗皇帝にまゐて救をとゝめむべし龍王
是に走こぶひ泪とおさへて退きぬ

前章之下

其夜太宗皇帝の夢に龍王来りかるゝんでまるへ吾上天の玉玉

龍王罵
太宗嘖
直約

帝の勅を請き其罪に依て明日午の時陛下の臣魏徵を斬
いましられ悲の情を垂るべし吾命をとゝひむとくと
奏し奉れば太宗其事を諾しゐかとおりひくそなへそなり太宗
不思議の事におやしめし次の日魏徵が朝に出ずとゝめて臥
時刻を移しゐ午の三刻に成りて魏徵忽ち頭を低て睡り
たりけるありて一人の官人龍の頭を提御前に跪て奏しゐ兵今
千歩廊の南十字街のほとりにて龍の首雲中より地に落ち
たりとぞ敵送に侍へすると奏聞に及時魏徵目を再孫して
奏しゐ上帝昨夜臣に命じてこの罪を犯せし龍を斬しめゐ
然ども陛下棋を囲んぐ臣を去らしめゐるをとゝ今奏乃
中に神を怒し雲中にて龍を其が斬殺せり太宗宮に

ゐと限り臣其夜太宗の御前に侍て我身を抱き未
太宗を罵て曰く吾昨夜你と約して吾命を救ゐんと成話し
今日却て魏徵をして吾を殺しむ今汝を引て閻王の廳下に
理非善悪を糺をべしと御ゐと執て引ゐんとする如に一人の美人
雲中より下り揚柳の枝をのめく龍王をはらひ除ゐの方へ去り
ゐ美則土地廟に滞留ゐ観音大慈悲菩薩ゐり太宗
おどろき覚ゐゐゐど是より玉体異例にまりく御悩日くに重ち
せゐ文武の百官朝に集り今ハゐ崩御の際とゐ之を殺ハれ
魏徵御前に進ミより奏しゐハ臣一封の書を陛下に捧まゐ人
陰司にゐりゐく酆都判官崔珏とゐ人者にこの書とゐくゐ
命陰司にゐて生死の簿子を考ゐる役人ゐり渠かなゐ其

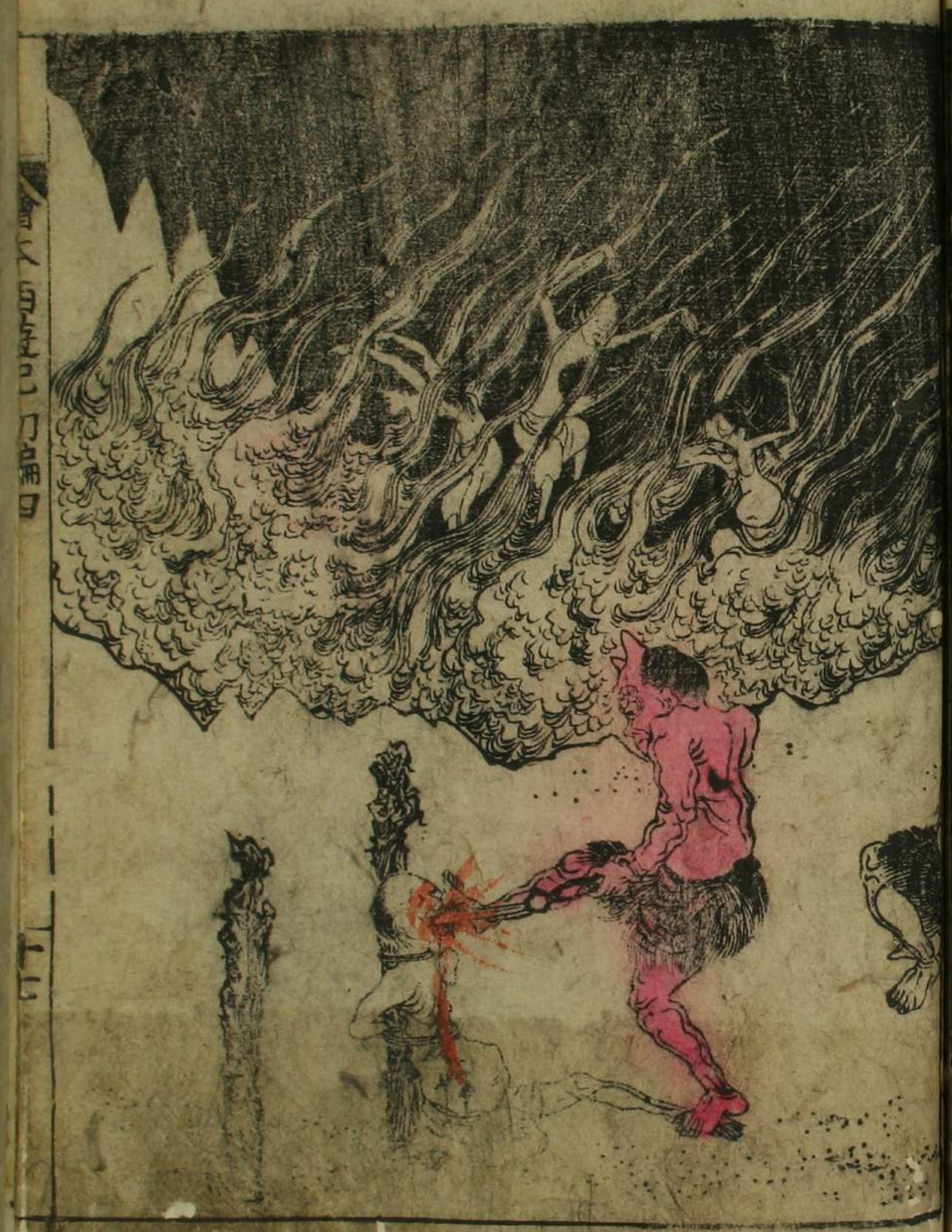
太宗崩到
閻王宮中

書を見て陛下を救ひたまへ〳〵とそて書を封じて奉り太宗これを取て床袖の内に收め給ひ卒然として崩じ給ふ其時太宗とはじめたまふ武の百官歎き悲しみ暫く白虎殿におゐて接竜を停めたまふ

遊地府太宗還魂　進凡果劉全續配

太宗皇帝の魂魄都を出てそこともなく荒る野をとぼ〳〵なる西をかけさせ給へ折ふし大唐皇帝暫く待せ給へやと声をかけてうの酆都判官崔珏所前ちうくとそこよりうの謹で奏〳〵たてまつる涇河龍王の事に依く今日陛下に所くまつり給へと承り御迎の為参りたと演られば太宗大きに驚たまひかの魏徵が書

牒をとり出〳〵てよく〳〵後へ崔珏ひらきこうして再び奏〳〵けるは陛下所仏を安じ給ふ某よりきに計ひやうて陽間へ回えり給らんとて所まを投くそこそこ行に閻王の使迎とうて青衣の童子二人幢幡寶蓋を立て道を守護ふ程なく一つの城門に至り給へ一面の牌を掛く幽冥地府鬼門関と七字の金書あり此時閻王陛下を下てて生迎〳〵迎に奉る閻王先向く曰く陛下前日龍王の命を救んと約〳〵却て渠が殺〳〵給へ何故そそやを太宗答のたふ吾ハ龍王の命を救へんと計つ〳〵かども誰か知らん魏徵徳神変ありて変に化して渠を斬うこれ朕が力の及ざる所なり閻王の曰くかの龍王未生と前既に魏徵が殺さるべ〳〵と我簿子に書きたり



太宗巡視
十八地獄

弘きごる渠安に来て礼しをしたりしかば陛下と逆
なる旅て我くとらんとをもへなとそて崔珏をめして太宗の御
命をたづねられに崔珏忙ぎ簿子を出して查べるに南瞻部州
大唐太宗皇帝注定貞觀一十三年と記したり崔珏大きに
驚きあきれと取く一の字に二畫を副へ三十三年と改め閻王に
なれい閻王是をうけて太宗皇帝御壽命今ようの後猶二十七年の
寶算ありしをやに陽間還しなるべし但陛下の御妹壽永が
からざるに似ようようく法を修ぶしして朱太尉と崔判官
兩人に命じて太宗を送らむ太宗閻王に向て再拜朕陽間に還う
て後此墓を造りて式恩を謝しなるべしと約束し逆に森羅殿を
出るに朱太尉引魂の幡をとり崔判官は後に供奉轉輪藏

ようをもく地獄のありさまを一くに看せしなる抑十八層の地獄とは
八或火の坑に落し或は舌を抜き皮を剝或は碓に入く是を搗或は
腸を抽く氷の中に身をくるしめ或は油に煎てを煎りやめもあらぬ黒暗を
地獄其外刀山血池阿鼻獄杵杵獄などさるくの刑場ありて
犯せる罪に応じ罪人と呵責する鬼どもの間なくいそしけるそ
世の人の悪行を積るさまざまにてそとなくぐ後に涙にくれるを
きこ金狼の橋と落るもの其傍に奈何橋とて罪人の渡る橋を
寒風吹く人の肌を烈血の浪湧てて天も供に紅とは浪咽て
四方に響へ氣も魂も身にそなる太宗武所ともるに行く枉死城に
さまかれば其途に数万人の餓鬼どもむらがり集て我命を還せ
我命を還せと叫び太宗を通しなるに崔判官巻しけるは

太宗施
餓鬼諸
財物
太宗皇帝
崔玉

陛下ハ通を快く通らんとおもひまつぶ式西に十三の庫あり内に金銀
と積貯ふり是ハ河南開封府の住人相良と云者の金銀なり陛
下これを借用して餓鬼どもに施し給へ太宗大きによろこびの庫
より金銀をとり出させ餓鬼どもに分ちつかはし給へ皆拝して通ると
らきを宗を通りける行ゑ六道輪回辻に至り給へ或ハ東西或
南北おのがうるゝ迷ひ行ら陽間善悪の業因にとれりといとをつかれ
にて見ひく遠に貴道門より泥府の塗と出給へ朱太尉一疋の馬
と牽来て太宗とのせまり陛下陽間に帰り給へ其の餓鬼たち
あに水陸會とをなして冤恨をとゝひ給へとを終りて忽ちごとくに
渭水の通りにるゝ水庭より金銀の鯉魚二つうつくしきをつかれ
遠通ゑにけるとびたるむりを太宗馬を止めく御覧ける朱太尉も

きこえ声を励し作ゑやく陽間に還るべしとのゝしりとおりへば太宗の
脚をとらへく渭水の底に撲的と突落しなり式ハ大唐の朝廷ハ
いろ式の百官太子后妃こぐ〳〵より逢ひ給ひ涼晴の儀式をとと
ゝく執行ひ給へ和しも擅の中より我と殺つくと連れに叫
給へ衆の官く驚き給へ擅を開きて扶け起しまれへ
に眼をとゝきこ給ひ朕今馬に乗りて渭水の岸にえ給ひ鯉
魚の戯るゝとゝ見るらしを朱太尉ゝ中に推落され已り
おぶれ死ぬとせりと語り給へ衆臣皆曰く臣等そとゝ式にあり
陛下何の水に溺ゝ給へ事ハいらんとてさゝ〳〵いさらん抱し
なれば魏徴則大醫院とやして定魂安神の御薬とゝめ給へ
其夜八百官退出し翌朝に至りて太宗皇帝遂に御地常に

太宗皇帝

太宗皇帝
蘇生棺中

後一金堂殿に諸臣とめされ陰司の冥官と具に御地獄めぐり遊ばされ
非常の大赦を行はれ天下の罪人四百余人を赦しものく家に
還らしめ亦人皆万歳と唱へ御代永久を祝したり

池清

繪本西遊記初編巻之四終

池清

和漢書物 小説貸本所

金井	小二郎一代記 三十 大尾	山田先生編	
新説暁天	星五郎一代記 五十 大尾	伊藤專三編	
怪談	牡丹燈籠 三十	三遊亭圓朝演述	
塩原	多助一代記 四十 大尾	同	
平業	文治一代記 全	同	
大岡	小西屋政談 十二		
近世小説	河内山實録 五十 大尾		
繪本	星月夜顕晦録 三十 大尾		
大郷穆	燕山外史 二冊	編	

一御花主様方もく所まげん無恐院殿極楽浄土へ移つて移居
年来かゝ本源世仕の安所かげを以て日にはし繁昌佐りて
がら紀仕合に本源世に相成西洋各國の書物
飜譯書繪入稗本滑稽その都の風俗類品こ洋山を所る
仕様別ねゞん下直こ相働差こ屋同御高覧の程こ相替こ
御注文下さる度猶此繁昌こ仕方様に風穴佛様新書
月 日

誠光堂謹白

東京京橋區弥左エ門町十三番地
文永堂 大嶋屋傳右衛門
同牛込區細工町十六番地
誠光堂 池田屋 清吉